第二の人生はゲームのようです～『イレギュラー』

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第二の人生はゲームのようです～『イレギュラー』

【Ｎコード】
Ｎ４６５７Ｚ

【作者名】
紅優也

【あらすじ】
この作品はてんびん座様の『第二の人生はゲームのようです～』に私の作品のキャラをクロスさせた作品です。
出来る限りてんびん座様の作風を壊さないように頑張りますので生暖かい目で見て下さい。

プロローグ（前書き）

始まりは怒りと交渉

プロローグ

世界の意思ＳＩＤＥ

『……また始めるか。』

『転生者ゲーム』。

神々の気紛れで決められた転生者による気紛れゲーム。

数年前『教授』こと『レン＝ベルツ』による神々に対する反乱を起こして以来第二の教授の出現を恐れて誰もやらなくなったが今回は凄まじ過ぎる教授の進撃に恐れをなした最高神が教授の進撃を止めようとしたが世界の崩壊を恐れていたために教授の口車にあっさり乗せられ再び始める事にしたらしい。

『再び俺が治める世界を戦場に選ぶとは良い度胸をしているな……レン＝ベルツ……』

俺はゆっくりと立ち上がり神界に俺を転送する。

「「ない。」」

「ほお、転生者ゲームをやるのか。

そのゲーム、俺も混ぜてもらおう。」

俺の言葉に最高神の馬鹿共は絶句しレン＝ベルツは此方を振り向き

……

「誰だお前は？」

と、言った。

……

教授ＳＩＤＥ

「（……何だこいつは？）」
俺こと『レン＝ベルツ』は突如絶句した二人の最高神の視線の方向に振り向いたらそこには絶句している二人とは比べ物にならない程の威圧感を誇る男（と、言うよりは『漢』だな）が立っていた。

「誰だお前は？」
「俺か？
俺はお前達が転生者ゲームを行う世界『魔法少女リリカルなのは』の全ての世界を治める『世界の意思』だ。
そこの馬鹿二人とは色々と因縁があってな。
あと言葉に気を付けろ若造。」
男『世界の意思』が溜め息を吐きながら俺に注意をする。

「はん！
てめえなんざが出る幕じゃねえんだよ！死ね！」
言いながら俺の部下である『ライア＝ベルツ』が飛び掛かり……俺と俺やライアと一緒に来ていた部下の一人『ルナ＝ベルツ』の上をライアが飛び越えていった。

「「……は？」」
「ふん、貴様の部下は口は一人前だが腕は半人前以下だな。
俺の実力を見切れんとは。」
ポカーンとした表情で吹っ飛んでいったライアを見ていた俺とルナにパンパンと手に付いた埃を落としながら世界の意思が言った。

「一応言っておくが貴様等が俺の転生者ゲームへの参加を認めなかった場合は即座にお前達全員の転生者が俺の管理する世界に入れぬ様に『拒絶』をかけて戦い事態を成り立たなくさせてやる。」

ち、面倒くさい奴が介入してきたものだぜ。

「……しょうがありませんね、許可します。」
「ち……好きにすれば良いだろ。」
「ち……戦い事態が成り立たなくなるよりは増しだ。
参加しろよ。」
最高神達も俺も渋々ながら世界の意思の転生者ゲームへの参加を許可する。

「ふん、当然だ。
ルールを決める際は俺も呼べよ。」
そう言って世界の意思は自身を転送していった。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
あんの糞野郎が！絶対に『ギャフン』と言わせてやる！」
「そうですね～～あいつの泣きっ面を見てみたいものです。」
世界の意思が去るとライアは猛り狂いルナは冷たい殺気を発する。

「お前等『今は』落ち着け。」
俺は二人を宥めながら他の部下が入るところまで転送した。

続く

プロローグ（後書き）

如何でしたか？
次回は世界の意思の転生者が明らかになります。
次回『転生者は迷惑を掛けた奴』
お楽しみに！

第一話（前書き）

転生者は迷惑を掛けた奴

第一話

世界の意思ＳＩＤＥ

よう、世界の意思だ。
俺は今レン＝ベルツや馬鹿二人とルールについて決めてきた所だ。

因みにルールだ。
『転生者は同じ年齢とする。』

『転生者は無印、Ａ，ｓ、ＳｔＳまでは最低でも辿らせる事。』

『転生者は殺さなくても降伏、若しくは勝手に死んでも敗北とする。
転生者は降伏したら神と話したりした事や特典についての全ての記憶を失う。』

『転生者は現地では自身が転生者だと知られてはならない（知られた場合は降伏した場合と同じ罰を与えられる）。』

『転生者の肉体は死亡する直前若しくは直後とする。（なお、破った場合はその転生者を転生させた神は問答無用で敗北とする。）』

『転生者に対する特典は三つとする。
増やす事も減らす事も禁ずる。
（破った場合はその神は問答無用で敗北とする。）』
が、ルールだ。
因みに（）内の言葉は全て俺が提案したルールで馬鹿共が承認した。
レン＝ベルツの事だから下手をしたらルール無用のやり方をしかねんしな。

まあ……

「奴等が転生させる奴は分かり切ってるがな。」
レン＝ベルツは恐らく奴が所有する天使共の内一人を転生者として登録するだろう。

赤毛の最高神はそれを予測して絶対にレン＝ベルツに対して恨みを持つもの……即ち前回の転生者ゲームでレン＝ベルツにこてんぱんにやられた奴等の内一人を自身の転生者に仕立てあげるだろう。

金髪碧眼の最高神はその逆手を取り恐らく原作キャラの身内になりそうな奴を自身の転生者に仕立てあげ何もできないようにするに違いない。

「ふむ……」
予測出来たとしても俺がこのゲームについて素人なのは否めん。
誰を転生者にすべきか……ん？転生者？

「『目には目を歯には歯を魔導士には魔導士を転生者には転生者殺し』だ！」
奴を使おう！

……
ゼロムＳＩＤＥ

「っで、僕なんですか！」
「っで、お前なんだ。」
僕『ゼロム・グラシアム』は目の前でニコニコ笑っている人『世界の意思』を見ながら突っ込みを決めた。

いきなり『来い！』と言われてこの空間に連れ攫われてみれば『転生者ゲームに参加しろ！』と言われるし……はあ。

「まあ、僕に拒否権は無いんですけどね。」

「まあな。」

世界の意思は僕が『レイス・クロフォード』によって『アスラクライン』の世界に吹き飛ばされた際に再びこの世界に帰れる様にしてくれた恩があるから断る訳にはいかないんだよね。

「で……望む特典は何だ？」

『特典』……第二の人生を生き残る為のキーカード……

「……皆の能力や魔法を『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』に登録しておいて下さい。」

一つ目は単純に僕のレアスキルの強化。

皆の能力があれば此方にぐっと有利になる。

「解った。二つ目は何だ？」

「二つ目は……八神部隊長の弟として転生させて下さい。」

『ＰＴ事件』から始めるのなら両方と戦いやすい人間の家に転生するのが利口な方法だろう。

「相変わらず頭良いなお前は。

最後は何だ？」

「デバイスは最初から所持で『ゼロ』と『リィン』を使わせて下さい。」

今までずっと一緒に戦ってきた二人を今更使わないなんていう法律は無い。

「ま、妥当な願いだよな。」
世界の意思はこほんと一息おいた後……
「適当に逝ってこい。」
え？字が違……
僕の意識はそこで途切れた。
続く

第一話（後書き）

如何でしたか？
次回はゼロムが負け犬剣士こと『河内亮』と最強転生者こと『高町星』に遭遇しますが戦闘はしません。
次回『温泉と予言とニュータイプ』
お楽しみに！

第二話（前書き）

温泉と右ストレートとニュータイプ

第二話

零（ゼロム）ＳＩＤＥ

僕『ゼロム・グラシアム』こと『八神零』は只今姉である『八神はやて』と一緒に温泉に来ておりました。

「零～～～はよ温泉行こうや～～～！」

八神部隊長もといはやて姉さんはこの頃って本当に純情なんだなあと僕の世界でのセクハラ部隊長の顔を思い浮かべながら思っていた。

「いや、幾ら何でも早すぎるよ……ちょっとは休ませてよ……「問答無用や！」いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

訂正この強引な性格はやっぱり未来の八神部隊長に似通っている。

『マスター……心中お察しします。』

ありがとうゼロ……

因みにリィンやゼロは四歳の誕生日の時に父さんがくれたペンダントがゼロだった。リィンは元から傍にいるというおまけ付きである。

……

「はあ……もう良いよ解ったよ。

入るよ入るからこの手を離して。」

はやて姉さんに強引に温泉の暖簾の前まで連れてこられた僕は観念して温泉に入る事にした。

「♪～～～零は知らんやろ？」

？何を？

「十二歳までは混浴ＯＫなんよ温泉って♪」
……忘れてた！

「ほな、入りましょ♪」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
僕ってやっぱり不幸体質だなあ……

……
「うううう……やっぱり女湯って恥ずかしいよう……（焦）」
誰かが入ってきたら僕は『何で入ってるの！（怒）』とか言われて怒られるのでは無いかとヒヤヒヤしている。

「う～～～ん！気持ち良いなあ～～～！」
そんな僕の気も知らず強引に連れてきた姉は僕の非難の視線にも何処吹く風だった。

「もう……出て男湯に入るよ。」
「あ……もう……もうちょい姉弟のスキンシップしようやん。」
「姉さんが強引に連れてきたくせに何を言うのさ。」
僕は脱衣場への扉を開け……僕の視界一杯に飛び込んできたのは幼い頃の高町一等空尉と友人の『アリサ・バニングス』さんと『月村すずか』さんと『星』さんとそれから見知らぬ少年の裸体だった。

「あ……」
しまった誰かが入ってくるのを完全に失念してた。

「き、キャアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ボカン！

僕は高町一等空尉の右ストレートを受け漫画の様に宙を舞った。
流石高町一等空尉……幼少とは言え良い拳をしてます。
僕は温泉に思いっきり体を叩きつけられながらそう思った。

……

亮《負け犬》ＳＩＤＥ

「ご、ごめん！痛くない？」
「う、うん。（本当は頬が激しく痛いです……）」
「もう、慌てて出るからそうなるんやで？」
「いや、姉さんが強引に僕を連れてきた所為だと思うけど？」

俺『河内亮』は風呂から出ようとしてなのは達の裸体を見てしまった為になのはにぶん殴られて漫画の様に宙を舞った少年『八神零』にある疑いをかけていた。だってそうだろ？
はやてに弟なんていないしそもそもはやてとなのははこんな出会い方をしない。
そして……一番ムカつく事はなのはが頬を赤らめている事だ。

「（……まてよ？
何でこいつは出会って間もないなのは達に打ち解けてるんだ？）」
なのは達の話を聞いていると何だか零はなのは達の好みや性格を把握している様に思える。
はやては姉だからってちゃんとした理由があるからまだ良いとしてなのは達はおかし過ぎる。

「（まさかこいつは……『教授』の……『ベルツ』側の転生者の仲間か！？）」
だとしたらなのは達に打ち解けているのは後に機動六課に入った際

に裏切りを行うのに絶好のポジションを得るためだと解釈できるしなのは達にフラグを建てれば管理局を裏切らせるのも容易いからだ。

「（くそ！ふざけやがってその温和な顔の下にどんな狡猾な策を隠してやがる！
なのは達は絶対に俺が守る！）」
八神零……お前の化けの皮は絶対に剥いで切り刻んでやるぜ！

……
零ＳＩＤＥ

「（本当に便利だな『ニュータイプ』って。）」
僕は今転生者の一人である『河内亮』の心を覗いてみたんだけど（僕に完璧な敵意を向けていたからだ）……疑われたもんだね。

「（『教授』、『ベルツ』。
これはもう一人の転生者の所有神だと考えて良いな。）」
『高町星』さんも転生者だろうけど今は転生者四人が揃ってから行動した方が良いだろう。
二人を此処で片付けても良いんだけど教授側の転生者が洒落にならない強さだったら大変だしその時の都合の良い生け贄（みがわり）がいないとね。

「じゃ、姉さん僕は出るよ。」
「ん、ちゃんと体を良く拭くんやで？」
「解って……はれれれれれ……？」
温泉から出ようとしたら視界が揺れ倒れそうになる。あ、逆上せたのか……

なのは（名前呼びを許可された）が僕を慌てて支えようとして……
僕が押し倒す形になり唇が重なった。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？
零のファーストキスがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
はやて姉さんの悲鳴を聴きながら僕の意識は途絶えた。（因みに僕は今六歳です。）

………

目を覚ましたらなのはが顔を深紅に染めて隣に座っていた。
「え〜と……何で？」
浴衣は此処の備え付けだろうし、布団がかけられているのは逆上せたからだろうけど……

「何でなのはがいるの？」
「はあ……貴方がなのはの唇に重ねちゃって気絶した後なのはも真っ赤になって気絶したんですよ。」
何時の間に来たのか星さんがそこにいた。

「え………〜〜〜〜！！！／／／／」
思い出されるなのはの唇の柔らかさ、そして何故か高鳴る胸の鼓動。
「すいまっせんでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
で、土下座。

「「何で！？」」
重なる二人の声（流石姉妹だね）。
「いや……その……六歳なのにファーストキスを奪っちゃったから……」
僕は顔が赤くなるのを感じながら土下座の理由を述べる。

「？？？それがいけない事なの？」
「（……多分十五、六歳で転生しましたねこの子は。）」
なのは……君はファーストキスの意味を知らない。
それから星さん、それは自分が転生者って事をバラす様な考えですよ？

「そ、それは今は置いといて。
あ、あのね零君……その家に食べに来てくれない？」
なのはさん（僕の世界ね？）の実家は『翡翠屋』っていうケーキ屋を営んでいて（最初は僕も『ヨハネ』も『ペテロ』も『嘘だ～～～。』と思ってたけど本当だった。）前世では良く利用していた。

「え？別に良いけど……」
「本当！？ありがとう！」
ニコニコと笑うなのはに何だか胸がドキドキする僕だった。

（「「「やっぱりゼロム（君）って朴念人だな（だよね）。」」」）
頭に現れた『織斑』さん、『吉井』さん、『衛宮』さんの三人は殴り倒した。

にしても……なのはの家に行ったその日に戦闘になるとはね……

続く

第二話（後書き）

如何でしたか？
因みにこの作品のヒロインはなのはです。
次回は零がルナに遭遇し三人と戦闘します（因みにその時亮をぼこぼこにします）。
次回『遭遇と忘れと本家との差』
お楽しみに！

第三話（前書き）

遭遇と忘れと本家との差
負け犬超アンチです！

第三話

零ＳＩＤＥ

僕は今なのはと星さんに連れられ姉さんと一緒に二人の家の『翠屋』（ここら辺は世界の違いか？）に来ていた。

「はあ……」

「何や溜め息なんて幸せが逃げて行くで～～～？」

姉さん、貴方は此処にいる男子が僕だけだという事を気にしないからそう言える。

因みに河内亮は何か用事があるとかいって帰った。

うう……緊張するなあ……

考えている内になのはが扉を開けて僕らを招き入れる。

やれやれ……此処まで来たからには腹を括るしか無いよね！

……

ルナＳＩＤＥ

今日は『ルナ＝ベルツ』です。

私は翠屋にシュークリームを食べに来た所です（因みに私が作ったのよりも美味しかったので軽い敗北感を味わいました）……て、誰に説明しているんでしょうか私は？

すると店に三人の女の子と一人の男の子が入ってきました。

二人は見覚えがあります。

高町なのはと八神はやて……あれ？

二人ってこの段階で知り合いでしたっけ……？
私はもう二人を見て危うく飲んでいたコーヒーを吹き出す所でした。
「ん？ああ、なのはに星……友達か？」
何故カウンターにいる青年は八神はやてに似た少年に殺気を飛ばすんでしょうか？

「あ、うん。そうだよ。」
「や、『八神零』と申します宜しくお願いします。」
「八神はやて言います宜しくお願いします。」
星さんに零さん……星さんはなのはさんに似た容姿を持っていますが髪はショートカットです。
零さんは八神はやてに似た容姿を持っていますが此方は銀髪を背中まで伸ばしているのでうっかりすると女の子にも見えてしまいます
（ここら辺には私は親近感を持てます）。

私はなのはさんもはやてさんも双子とは聞いていないので十中八九転生者ですね～～～。

「（早速見付けました～～～。）」
『（どうします？今仕掛けますか？）』
と、私のデバイスである『アルテミス』が聞いてくる。

「（いえいえあの性悪の『世界の意思』とかが選んだりした転生者ですよ？）」
そんなに簡単に上手く行くわけがありません。
……少し探りますか。

私は周囲に他の客がいるのを確認し……全力で殺気を出しました。

星さんは椅子をガタン！と言わせて立ち上がり……あれ？
零さんが立ち上がりませんね～～～？
因みになのはさんとはやてさんはきょとんとしていました。
それからカウンターの青年はキョロキョロと店内を見回していました。
何ですかこの店は？
超人喫茶か何かですか？

まあ、これで星さんの力量は解りました恐らく彼女は純粋な魔導士か半人前でしょう。
零さんについては……今は保留にしておきましょう。
私は残ったコーヒーを飲み干し……その瞬間封鎖結界が発動しました。

……
零ＳＩＤＥ

「（殺気……こっちが反応するかどうか見てるねあの人。）」
ベルツ側の転生者の人、甘いよ。
僕は『白獅子事件』の際にその手でシグナムさんにばれて戦闘を強いられたんだからのるわけが無い。
だけど案の定と言うべきか言わざるべきか……星さんは椅子をガタン！と鳴らして立ち上がった。
因みに恭也さんは店内を見回した。
相変わらず武術の達人が多いよねなのはさんの家族って。

「（さてと……）」
僕は腰のポーチに手を入れてＵＳＢメモリの様な物体……『ガイアメモリ』の内『Ｓ』と書かれたメモリを取り出す。
そして封鎖結界が発動したので……

「（ごめん、皆。）」
『ストップ！！』
瞬間封鎖結界の中（因みに封鎖結界の中の人には解らない）と転生者以外は全て僕が使ったガイアメモリ……『停止の記憶』を持つ『ストップ』のメモリの効果により動きが止まる。

「ん？どうやら星さんと他一名は外に出たみたいだね。」
お金を置いていく辺りが律儀だ。

「さてと……『ライアーズマスク』。」
僕は神の卵に内蔵されている力を使い前世の顔にして八神零だとばれないようにする。

「さて……『ライガーゼロ・改』セットアップ！武装は『イエーガー』！リィン、行くよ！ユニゾンイン！」
『了解です、マスター。』
『はいです！』
ゼロは『ペンダント』からリィンは『僕の影』から答え僕の体に黒い外套とブースターが大量に着いているネイビーブルーの鎧が装備され更に装甲に銀色が追加される。

「さ～～～てと！」
『アクセル！！』
僕は『加速の記憶』を持つ『アクセル』メモリを使いイエーガーの最大加速を越えたスピードで二人を追い始めた。

……
僕が現場である『海浜公園』に来た時は既に戦いは始まっていたけど……

「貴方誰でしたっけ？」
ベルツ側の転生者が河内亮に首を傾げている場面に遭遇した。

「誰、だと……？」

「あ、すいません～～～～初対面の人には挨拶をしませんとね！
私の名前は『ルナ＝ベルツ』です～。」
ふむ……と、すると『教授』が敵の名前か。

「……テメエ、ふざけるな！！」
無理だよ河内亮。
踏まれた人間は忘れにくいけど踏んだ本人は忘れやすいんだよ。
最もルナ＝ベルツは他人を戦車で踏み潰しても忘れてそうだけど。

「まさか……本当に覚えて無いのか？」
「だから貴方とは初対面ですって。」
うん。完璧にルナ＝ベルツは君の事を忘れてるね。

「俺だ！俺！河内亮だ！」

「河内さんですか……誰でしたっけ～～？」
本当に最低な人間ですね貴方は。

「ふ、ざけんな！
力尽くで思い出させてやる！」
そして二人は剣を重ね合うけど河内亮もルナ＝ベルツも中々の使い手だ織斑さんや衛宮さんと良い勝負をするかもしれない。

だけど……

「そんな小さな腕や足で適うと思いますか～～～？」

リーチが違い過ぎる。

多分変身魔法を使って大人になってるんだろうけど先ず剣は腕が互角の場合は距離が勝敗を分ける。

あっさり河内亮が蹴り飛ばされそのままルナ＝ベルツが近寄り……ん？手を翳して何をするつもりだ？

「食らいやがれ！『ＡＩＣ』！」

……あ？

次の瞬間バインドも使われていないのにルナ＝ベルツの体が止められる。

……ふざけるなよ？

その力は『ラウラ』さんの象徴なんだ！お前が使っていい力じゃないんだよ！

「やれ、星！」

「『ブラストファイヤー』！！」

な！？デバイス無しで砲撃！？どんなチートだよ！？

『リジェクション』

だけどルナ＝ベルツはシールドを斜めに展開する事であっさり防いだ。

そしてＡＩＣが凍り付き砕け散った。

「ふむ、中々の腕前ですがそれが本気なら興醒めです～～～。取り敢えず二人仲良くジ・エンドです。」

「誰が！

ジ・エンドはテメエだ！」
そして猿真似野郎の前に『ミッドチルダ式』の魔方陣が複数出現して……何も起こらない……？
まさか……
「！？ご……あ……」
ルナ＝ベルツが吹き飛ばされる。
やっぱり……
『マスター。
言う必要は無いかもしれませんがあれは『鈴』様の『龍砲』です。』
そうか……ははは……そうかよ！
僕は隠れていた茂みから飛び出し……
「どうだ！龍砲の威……「黙れよ……猿真似野郎がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！歯を食い縛れ！！！」ぐはあ！？」
思いっきり猿真似野郎を殴り飛ばした。
……
亮《負け犬》ＳＩＤＥ
「どうだ！龍砲の威……「黙れよ……猿真似野郎がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！歯を食い縛れ！！！」ぐはあ！？」
ルナ＝ベルツに俺が新たに得た力を披露したら突如脇から殴り飛ばされた。
「ぐ……！
テメエ……何者だ！」
「僕か？僕の名は『ゼロム・グラシアム』！

君達と同じ転生者だ！！」
な、何だって！？
八神零は転生者じゃないのか！？
「え！？じゃあ八神零は何者ですか！？」
ルナも驚いたらしく珍しくアイツが慌てていた。
「ふん、お前達が言うところの『オリキャラ』って存在じゃないかな？」
オリキャラ……そうか、俺やルナっていうイレギュラーが入るんだ。
当然な答えかもしれない。
「待てよ……猿真似ってどういう意味だテメエ！」
「そのままの意味だ。お前がその能力を使う事は『IS（インフィニット・ストラトス）』のキャラクターを侮辱しているのと同じ事だ。」
「テメエ……！」
舐めんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！龍「はあ……こんな馬鹿に龍砲を使われる鈴さんも不幸だな。らあ！」ごふう！？」
俺が龍砲を使おうとしたらゼロム・グラシアムが接近していた。
何……で？
「ふん、素早い相手には自らの動きを固定してしまう龍砲は不利なんだよ。使い手ならそれ位覚えとけ。」
「ぐ……舐めんな！
『ブルーティアーズ』！」
俺はビットを出しゼロムに向かわせる『セシリア』との違いは俺も動ける事だぜ！

「馬鹿が。」
一瞬で四つのビットを全て爪で砕いたゼロムは神速でやってきて俺を蹴ろうとして……俺はＡＩＣを使い止める。

「……お前は多分噛ませ犬だな。」
何とＡＩＣを振り切りそのまま俺に蹴りを決めた。

「ご……ふ……」
「……『セシリア』さんは動けなくてもビットの動きは複雑で精緻でそしてコンビネーションも抜群だった『ラウラ』さんは使われたら身動きすら取れなかった。
……お前は中途半端な猿真似なんだよ！」
猿真似……違う！
さっきまでは新しい力だったからだ！
最初から持っていた力は負けない！

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！『零落白夜』！！」
「……『輻射波動』。」
バリアなんか効くかよ！
ガギン！

「な………！あ………あ………」
「所詮は猿真似、出力最大とはいえまさか輻射波動で作ったバリアを切り裂けないとはね。」
俺の刃は……赤いバリアに一ミリもめり込んでいなかった。
「……失せろ。鳴り響け……終焉の笛！『ラグナロクブレイカー』！」
俺ははやての必殺魔法を受け気絶した。

続く

第三話（後書き）

如何でしたか？
次回は戦闘はありません。
次回『原作開始まで残り一年～それぞれの光景～』
お楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4657z/

第二の人生はゲームのようです～『イレギュラー』

2011年12月17日06時45分発行